

## 【秋の地貌季語の解説】

東日本 「鵜供養」(うくよう)

鵜供養や雲の流離りゅうりに水かの香かす

近藤 一鴻

長良川の河畔で鵜の供養が行われている。

鵜を川に放ちて鮎あなを捕らせる鵜飼うかい、あるいは鵜川うかわは『万葉集』以来詠われ、夏の季節の題目、季題として歌人や俳人に愛好されてきた。鵜船うねふね、鵜匠うねぢ、鵜縄うねなわ、鵜遣うねい、荒鵜あらかう、鵜簀うかぎりなども江戸時代の歳時記に載る鵜飼に関する夏の季語である。鵜飼の関連語は他にも多いが、今回の鵜供養は秋の新たな季語予備群として考えたい。

長良川の鵜飼いは五月十一日から十月十五日までなので、鵜供養は鵜飼が終わった直後の十月第三日曜日に持たれている。

西日本 「八月踊」(はちがつおどり)

船酔のままに八月踊りかな

安田 久太郎

沖繩人の明るさと逞たくましさの象徴が「八月踊」ではないか。沖繩の宮古諸島の一つ多良間島たらまじまで旧暦八月に行われる収穫祭が八月踊である。三日間行われ、国の重要無形民俗文化財に指定されている。華麗な舞が披露される。そこには沖繩の長い忍従暮らしを生き抜いた逞しさがある。感動がある。

薩摩藩に支配された首里王府は一六三七年から厳しい人頭税を実施。毎年旧暦七月までに穀税や反布税を納めなければ処罰するという。そのような過酷な諸税をなんとか完納した喜びを先祖の霊に報告し、感謝するのが八月踊である。